

南山アーカイブズニュース

NANZAN Archives News

第18号 2025年11月1日

目 次

巻頭言

設立母体修道会の使命カリスマ性に基づく学校法人の連携と団結

……………メレ、ウィニバルドス ステファヌス …… 2

南山発見

YAMAZATO60 という企て

～キャンパスを軸としたオウンドメディアの可能性～ …… 奥田 太郎 …… 4

外国人留学生別科創設 50 周年に寄せて …… オコネル・ショーン …… 6

いけばなのこころ 茶の湯のこころ

～南山女子部華道部・南山国際校茶華道部 …… 佐藤 真紀子 …… 8

「書く」ことの取り組みの変遷と聖霊生 …… 中村 春子 …… 10

かけがえのない南山小グラウンド …… 林 幸寿 …… 12

回想の中の南山

南山学園での半世紀 …… 近藤 健司 …… 14



螺旋階段：大学本部管理棟（現本部棟）1964～1978年（解説19頁）

巻頭言

設立母体修道会の使命カリスマ性に基づく 学校法人の連携と団結

メレ、ウィニバルドス ステファヌス

南山学園が2032年に創立100周年を迎えるにあたり、そのアーカイブズのあり方と役割について再考することは時宜を得ている。なぜなら、アーカイブズは単に古く、過去の文書を保管する静的な場所ではないからである。それらは学園のアイデンティティ、一体性、そしてコミュニティを構築し維持するための動的なツールである。アーカイブズは、過去と現在のメンバーを結びつける共通の歴史的物語を保存する、機関の集合的記憶として機能する。

学園全体とその傘下の学校の機能、成果、文化的・宗教的活動の記録を保護することで、アーカイブズは帰属意識と継続性を育み、生徒、教職員、卒業生、保護者を含むすべての関係者が、教育機関という継続的で生きているコミュニティの一員であることを再認識させてくれる。

透明性を支える記録を維持することで、アーカイブズは学園内の信頼と協力関係を強化する。学園史や創立者のカリスマといったアーカイブズ資料が、教育課程に統合されると、協同プロジェクトや研究が促進され、生徒、教師、事務職員間の協力とコミュニケーションが向上する。このような統合は、学園の歴史、アイデンティティ、そしてカリスマが単なる教科ではなく、共有された、具体的な現実となる学習環境を創出するという教育目標と合致する。このようにして、アーカイブズは本質的に、協力を可能にし、教育に統合し、支援とインクルージョンを育み、社会的結束と共通の価値観を育むための拠点となることで、学園の一体性に貢献する。

アーカイブズは、学園の物語と経験が、現在のメンバーと将来の世代にとってアクセス可能な状態を確保するために不可欠である。この歴史とアイデンティティを維持し共有することで、アーカイブズは帰属意識

と誇りを育む。この集合的記憶は、世代を超えたつながりを育み、個人が継続的なコミュニティの一部であると感じられるようにする。

本学園のようなカトリックを背景に持つミッションスクールの文脈では、アーカイブズは設立母体である修道会の歴史を維持することで、さらなる深い意義を帯びる。アーカイブズは、修道会の創立者のユニークな信仰のビジョンと使命を示す基礎的な文書や資料を保存することで、学校における修道会の創立カリスマを明らかにする。これらは、学校のアイデンティティ、精神、そして教育目的をどのように形作ってきたか、そして現在も形作り続けているかを示してくれる。注意深いアーカイブズ研究を通じて、霊的遺産と教育的カリスマは生き続け、現在および将来の世代に



アーノルド・ヤンセン（神言修道会創立者）

としてアクセス可能な状態に保たれる。

単なる歴史的保管庫を超えて、アーカイブズはカトリック信仰体験に基づく価値観の管理物となる。それらはカトリック教育の中心である霊的形成を強調し、信仰を中心とした教育コミュニティにおける価値形成としての学校の役割を強化する。アーカイブズは、創立時のビジョンを理解し、現在の学校教育コミュニティが現代の環境でカリスマ性を発揮できるように導くための事実上の基盤を提供する。このようにして、アーカイブズは、キリスト教の信仰に基づく宗教的価値観が、学校教育の文化、人間関係、そして教育目的にどのように浸透しているかを明らかにする。アーカイブズは、「身体、精神、魂」といった全人的資質を育むという使命を学校教育コミュニティに根付かせており、それは本学園のモットー「人間の尊厳のために」によく表れている。

聖職者や修道女の存在が減少しているため、アーカイブズは設立母体である修道会の遺産を世代間で確実に継承するための不可欠なツールとなり、それが失われるのを防ぐ。アーカイブズ担当者や関連委員会は、学園内の多様な学校や部門間の連携を可能にするファシリテーターとして機能する。このようにして、アーカイブズは、学校教育コミュニティのメンバーが、自分たちが何者であり、どこから来たのかを理解し、未来に向けた共通のビジョンを鼓舞するのに役立ち、学園の生活と一体性にとって不可欠なものとなる。

(南山大学社会倫理研究所・教授)

南山アーカイブズWebページリニューアルのお知らせ

2025年10月1日より南山アーカイブズWebページをリニューアルし、スマートフォンやタブレットでの表示に対応いたしました。新たに「デジタルフォトギャラリー」の項目を追加して画像のダウンロードが可能となりましたので、ぜひ活用ください。公開画像は随時差し替え更新していきます。



南山アーカイブズ
Webページ

南山アーカイブズ
NANZAN Archives

デジタルフォトギャラリー

新着

 A.ファンファーニ氏講演会 整理番号 DPG20251001-167	 図書館増築工事 整理番号 DPG20251001-166	 図書館増築工事 整理番号 DPG20251001-165
 本部棟 整理番号 DPG20251001-164	 グリーンエリア 整理番号 DPG20251001-163	 K・M教室棟 整理番号 DPG20251001-162

YAMAZATO60という企て

～キャンパスを軸としたオウンドメディアの可能性～

奥田 太郎

日本が東京五輪で盛り上がった1964年、南山大学は、新制大学としての開学から15年を経て、枳中の地より山里の地に本拠を移した。翌年、その新キャンパス全体を設計した建築家アントニン・レーモンドが日本建築学会賞（作品）を受賞すると、南山大学「山里キャンパス」はその後、建築業界では知る人ぞ知る建築群として、何世代もの学生たちを迎え入れることとなった。教育・研究を充実させるなかで、様々な施設の増築、瀬戸の地での新キャンパス展開、レーモンド・リノベーション・プロジェクトなどを経て、移転60年となる2024年、南山大学は、長年にわたるレーモンド建築の再生保存とキャンパスの継続的成長の取り組みが評価され、日本建築学会賞（業績）を受賞するに至った。

未だ歴史のない創設間もない頃に端的に作品として、さらに、60年の歳月を重ねて今も息づくキャンパスを育み続けてきた大学の実績に対して、度重なる高い評価を受けたという事実を、キャンパス移転後60年の今を生きる私たちはどう捉えるべきなのか。南山大学の積年の課題の一つは、大学内部の教職員や学生が、自分たちが日々暮らしているその場所やそこで為されている営みの価値を十分に理解していないことである。レーモンド建築が織り成すキャンパス、第三代学長ヨハネス・ヒルシュマイヤーの学術的功績、ユニバーサルミュージアムを志向する人類学博物館など、学外の人びとの方がその価値をよく知っているものは実は少なくない。全世界的に大学がその存在価値を問い直され変革を要請されている現況に照らしたとき、私たちには、こうした足下の価値あるものを自分たちで再発見し、そこに定位した各種のアップデートを行うための契機を成す橋頭堡が必要なのではないだろうか。

そのためには、キャンパス移転後60年と日本建築学会賞受賞を記念した事業に留まっていってはまったく十

分ではない。レーモンド建築の魅力を発信するだけでは、その影響範囲はせいぜい建築に関心をもつ人たちにとどまるだろう。よくよく考えれば、かつてレーモンドが、学問することの理想を形にしたこの学び舎の丘が、Beautiful Campusとしてその魂を得ることができるのは、在学中の学生、卒業生、歴代・現役の教職員たちが日々の大小様々な営みの中で育んできたNanzan Mindの蓄積あってこそ、である。その当たり前の真実をどう形にしていけることができるのか。視点を変えて見れば、日々の多様な営みは、個々の現場で花咲くが、そのまま現場で消え去っていくものでもある。それを経験した人たちがそれぞれの胸中の記憶や思い出としてささやかに抱き続けていくことにとどめず、その幾ばくかを南山大学の人びとの間で共有できるアクセス可能なアーカイブ構築へと繋げるとすれば、そのプラットフォームになるのは何だろうか。それは間違いなく、このキャンパスであろう。少なくとも、南山大学の「山里キャンパス」には、レーモンドの設計思想に裏づけられた、それを可能にするポテンシャルがある。虚飾を排した近代建築だからこそ、その上に折り重なる大学内の数々の営みが学び舎全体に染み込み、質実剛健なその内実となりうる。ならば、このキャンパスを基軸として、そこで営まれる様々なことをまずもって南山大学の人びとに伝え、足下の価値を確認していくウェブプラットフォームを設立するのがよいだろう。その際、そこから滲み出る南山大学の魅力を学外の人びとにも知ってもらえるクオリティの情報を提供する。そして、そうしたプロジェクトを業者に丸投げせずにはまずはハンドメイドで運営するのが望ましい。かくして、Nanzan Mindの宿るBeautiful Campusのあるその地を“YAMAZATO”と称し、人の還暦に準えた往還する歳月の60を添えたプロジェクト「YAMAZATO60」が立ち上がった。

YAMAZATO60の企画は、学長室広報・募金課のも

と、2024年秋から年度末までの半年間実施され、半月に1度の頻度で掲載記事を更新した。主軸となった連載企画は、8学部の学部長全員に対して行ったインタビュー記事「学部長が語る南山大学」である。第一読者を学内に想定した本企画では、学部長の素顔が垣間見えるリラックスした雰囲気の中にもピリッと筋の通ったインタビュー記事が成立している。どのインタビューからも共通するNanzan Mindが窺われ、南山大学の魅力の淵源に触れることができる。なお、聞き手は、南山大学卒業生のコピーライター村田真美氏が務めた。また、半月に1度の更新時には、キャンパス全域に個性的な装いの学部長たちの写真を配した告知ポスターを貼り出し、G棟廊下には特大ポスターパネルが一人ずつ追加されていく展示方法を仕掛けた。後日仄聞したところでは、ウェブ記事にはアクセスしなかったがポスターを楽しみにしていたという人も少なからずいたようで、身体的な伝達の強みも再認識された。

その他、学生たちによる南山大学PR動画制作コンテスト、一般募集のキャンパス内フォトコンテスト、さらに、図書館主催のレーモンド関連イベント等が実施された。多様な活動がキャンパスを軸にまとまりをもって発信され、アクセス数も良好で、一定の成果を収められたと評価してよいだろう。2025年度には、これを継承したYAMAZATO60+がスタートしており、「南山大学をあるく」「南山大学をはなす」「南山大学をはかる」の三つの軸で、キャンパスを起点とした南山大学の「ここ」を届ける記事の特設ウェブサイトに掲載している。

さて、こうしたYAMAZATO60とその後継の60+の取り組みが、一過性の酔狂なものだと誤解している人もいるかもしれないので、最後に一点付言しておこう。ウェブテクノロジーの進展とともに、2010年代後半頃から、企業を中心に「オウンドメディア」に光が当たり、様々な団体が独自のメディアを持つようになって久しい。大学では、明治大学がいち早くオウンドメディアを開設し、現在では国公立立を問わず、数多くの大学が運営している。それはもはや、入試広報の域を遥かに超え、大学の営みを社会に向けて発信し、その成果を様々な形で還元する、大学の社会的使命を担う事業と位置づけられている。それは、動きの少ない確定した情報を安定的に提供する公式ウェブサイトとは別の、日々動きのある活きの良い情報をその都度

届ける役割を担う。ポストトゥルースの時代において、AIによる要約が情報収集のスタンダードとなるなか、より確かな情報を蓄積・提供する学術の拠点としての大学がないうる独自の社会的情報発信の重要性はますます高まっていると言えるだろう。南山大学のYAMAZATO60と60+の取り組みは、独自の情報の発信とその記録・保存を兼ねる機能を有するものであり、プロジェクト立ち上げ当初から、来るべき南山大学のオウンドメディアのプロトタイプと位置づけ、進められてきたわけである。



YAMAZATO60+のトップページのイメージ画像

この先、南山大学のオウンドメディアを確立するためには、上質なコンテンツを日々それぞれの現場から集約する編集・発信の拠点が必要となる。外注した美しい外観をもつウェブサイトの殻だけ準備しても、継続的に質の高いコンテンツを発信できる体制がなければ文字通り「仏作って魂入れず」である。これはおそらく南山アーカイブズも同様の課題を抱えていることだろう。言うまでもなく、宣伝と広報は同じではない。日本広報学会が2021年に新たに定義した「広報」とは、「組織や個人が、目的達成や課題解決のために、多様なステークホルダーとの双方向コミュニケーションによって、社会的に望ましい関係を構築・維持する経営機能」である。これを敷衍すると、このオウンドメディアという課題は、南山大学に留まらず、教育機関としての南山学園そのものに突きつけられているとも言えよう。いずれにせよ、キャンパスを軸としたオウンドメディアが可能なのは南山大学ならではであり、今回のYAMAZATO60という企ての精髓が今後継承されていくことを願っている。

(南山大学社会倫理研究所・教授)

外国人留学生別科創設50周年に寄せて

オコネル・ショーン

私が外国人留学生別科 (Center for Japanese Studies、以下CJS) という名称を最初に意識したのは、南山大学に着任してまだ間もない頃だった。学内で偶然手にしたリーフレットに、日本語や日本文化を集中的に学ぶ留学生のプログラムが紹介されており、「ここにはどのような学生が集まり、どんな学びが行われているのだろうか」と興味を持ったのを覚えている。それからしばらくしてCJSの授業を見学する機会があり、世界各地から集まった学生たちが真剣に日本語を学び、互いに言葉を交わし、笑顔で交流している様子に心を打たれた。その空間には、教室の内外に文化の橋を架けようとする意志と熱意があふれていた。

南山大学のCJSは、1974年に創設された。大学創立25周年という節目の年に、南山の国際性をさらに高めるという明確な目的のもと、わずか24名の学生で静かにその歩みを始めた。設立当初からの理念は「日本語の集中的な学習を通して、外国人留学生が日本社会と文化への理解を深め、深い異文化交流が実現される場をつくること」と明快なものだった。以降50年の間に、CJSは日本語教育の拠点として国内外で高い評価を得るまでに発展し、これまでに10,000人を超える留学生を受け入れてきた。

私は、2022年4月から2025年3月まで国際センター副センター長（国際交流担当）を務め、2025年4月より国際センター長を拝命している。日々の業務の中で、CJSに関わる教職員・学生たちの真摯な姿勢に何度も心を動かされてきた。それにもかかわらず、2024年という記念すべき年に、この50周年の意義を自身の言葉として十分に記録に残すことができなかったことを、今、深く反省している。CJSの歴史と成果に対す

る敬意、そしてそれを築いてこられた方々への感謝を、もっと早く形にするべきだった。だからこそ、今こうして改めて筆を執る機会をいただけたことに、感謝の念を抱いている。

2024年には、CJSの50周年を記念してさまざまな取り組みが行われた。特設Webページが開設され、これまでの歩みを振り返る資料や写真、そして世界中の卒業生から寄せられた温かなメッセージが紹介された。卒業生の言葉には、「ここでの学びが人生を変えた」「南山での経験が今の自分を支えている」といった声が多く見られ、CJSがいかに深く学生の人生に関わってきたかがうかがえる内容だった。

また、2024年8月4日には、アメリカ・ウィスコンシン大学マディソン校で同窓会が開催され、CJSの卒業生に加え、南山大学の他の卒業生、協定校の日本語教師など多くの関係者が集まった。会場では旧交を温めるとともに、それぞれの今を語り合い、「いつかまた名古屋で再会しよう」と誓い合う姿も見られたという。国境や時間を越えたつながりが、CJSという学び舎を通して今なお続いていることに、改めてその意義の大きさを感ぜずにはいられない。

さらにこの年には、外国人留学生別科の発展に多大な貢献をされた町田奈々子名誉教授の最終講義が行われた。「ことばを学ぶということ」「留学の意義」について語られた講義には、多くの教職員、卒業生、そして現役のCJS生が参加し、会場は深い感慨と敬意に満ちていた。町田先生が歩んできた時間と、CJSと共に築かれてきた教育の積み重ねが、ひとつの語りとして形を成した瞬間だった。

記念ロゴマークの募集も学内で実施され、南山大学の学生、CJS生、教職員から10件の応募が寄せられた。その中から、当時国際センター事務室職員だった今井和子さんの作品が最優秀賞に選ばれた。作品は、縁起物として知られる「だるま」をモチーフとし、50周年の祝福と、今後もプログラムが継続・発展していくことへの願いが込められている。笑顔のだるまの中心には「CJS」のアルファベットが巧みにデザインされ、親しみやすさと誇りが共存するロゴとして、多くの人々の記憶に残るものとなった。



(WINNING LOGO 最優秀作品)

CJSの教育内容も進化を遂げている。現在は、日本語教育に重点を置いた「Intensive Japanese Program」に加え、日本文化・社会を学ぶ「Modern Japan Program」も提供しており、毎学期およそ150名の学生が世界各地から南山大学に集っている。2022年にはヤンセン国際寮が開設され、留学生と日本人学生が共に生活し、異文化交流を日常の中で実践する新たな取り組みが始まった。これまでのCJSの伝統であるホームステイ制度と並び、現代の多様なニーズに応える住環境が整備されたことは、次なる半世紀への大きな一歩である。

また、CJSはサマープログラムも毎年実施されており、2023年からは「Nanzan Anime Study Tour」という新たな試みが始まった。アニメを通して現代日本文化を学ぶというユニークな視点は、国内外から高い関心を集めている。こうした取り組みは、学生にとっての「学びの入り口」を広げるだけでなく、日本文化の多様性を伝える貴重な機会となっている。

50周年を迎えた今、CJSのこれからを考えると、

元CJS修了生でもある南山大学現学長のロバート・キサラ教授が強調するように、いくつかの重要な課題と希望が見えてくる。第一に、現在のプログラムの質の高さを維持しつつ、時代のニーズに応じた新たな教育内容を創出し続けること。第二に、卒業生同士や大学とのネットワークをさらに強化し、グローバルなコミュニティとしての連携を深めること。第三に、日本での就職を希望する留学生の支援体制を強化し、学びがより現実的な未来へとつながるよう後押しすること。そして第四に、これまでの日本語教育の蓄積を活かし、日本語教師の育成という分野においても南山ならではの貢献を果たしていくこと。最後に、国際共修の場をできるだけ創出する工夫をし、南山大学生とCJSの学生と一緒に学問に取り組む機会を拡大すること。

文部科学省は、今後も日本で学ぶ外国人留学生の数を増やす目標を掲げている。その一方で、質の高い語学指導ができる専門家の育成は、喫緊の課題となっている。国際性を大学のDNAとしてきた南山大学だからこそ、ここに積極的に関与し、全国的なモデルを築くことができるはずである。

50年という歳月の中で、CJSが積み上げてきた実績と信頼は、単なる数字では語り尽くせない価値をもっている。そこには、異なる文化や言語の間に立ち、理解と尊重を築こうとする努力の軌跡がある。今、私たちはこのバトンを受け取り、次の世代に向けてより豊かな国際交流の未来を創っていく責務を担っている。未来のCJSが、これまで以上に多様な学びと出会いに満ちた場となることを、心から願ってやまない。

(南山大学総合政策学部 教授)

いけばなのところ 茶の湯のところ ～南山女子部華道部・南山国際校茶華道部

佐藤 真紀子

私は国語科教員として国際校で30年余勤務し、23年3月同校閉校後、同年4月女子部に移籍し今年で3年目を迎えた。部顧問として現在関わる女子部華道部とかつて関わった国際校茶華道部での日々のお稽古を通して、生徒たちがいけばなや茶の湯のところにどのように触れたのか、その記録をここに残したい。

女子部華道部は、華道コーチとして嵯峨御流の青山美月先生にお越しいただき、二週に一度水曜の授業後にご指導をしていただいている。現在、中高合わせて23名の部員が在籍し、和やかな雰囲気でお稽古が進む。

活動場所は中一フロアの選択教室1。授業後の部活動時間になると、東校舎へ向かう多くの生徒たちが教室前の廊下を行き来し、大きなガラス越しに華道部の活動風景を興味深げに見て通り過ぎる。なかには自分もいつかお花をいけてみたいという羨望の眼差しを送る生徒もいる。

嵯峨御流は、『平安の初め、嵯峨天皇が大覚寺の大沢池で、菊ガ島に咲く可憐な菊を手折り、殿上の花瓶に挿され、その姿が「天地人」三才の美しさを備えていたことに感動され、「後世花を生くるものは宜しく之を以て範とすべし」と仰せになった。』ことが始まりとされる。青山美月先生は毎回嵯峨御流の歴史や文化を織り交ぜながら、流派独自のお道具の使い方や、草木や花のいけ方を丁寧に解説してくださる。花材を観察して、どの部分を使うかをよく考えたのち、さらに全体を見る視野を持つことが大切だとお話しされる先生の言葉を、生徒たちは熱心に拝聴し、先生の講義が終わると、花器は好きなものを選び、みな真摯な姿勢で花材に向き合う。

秋の文化祭には、慈しみのところをもって花に向き合った先人たちに導かれるように、生徒たちはお花をいけ、華展に自身の作品を置く。自然の産物である花と生徒一人一人の出会い是一期一会だという教えをお稽古によって習得した生徒たちの華展には、毎年多くのお客様が来場され、お褒めの言葉を頂戴している。



2025年女子部華道部 講義風景



女子部華道部コーチ 青山美月先生

2010年代の国際校茶華道部は、茶道並びに華道指導者として、表千家・池坊の梶浦美鶴先生と浅田扶美子先生にお越しいただき、毎週月曜の授業後に華道部、水曜日の授業後に茶道部のご指導をしていただいた。

最盛期には茶華道部合わせて40名を超える生徒たちが、お茶やお花の知識や作法を学びお稽古を続けた。特別棟地下一階にあった活動場所の作法室は、炉が切られた二十一畳の広間と踊り口のある四畳半の小間、露地、水屋を備え、生徒たちは学校に居ながらにして、伝統文化の空気をじかに感じ、そのところに触れることができたのである。



2017年国際校茶道部・夏期講習会
お点前は安藤比呂美先生（G19）

夏休みには梶浦美鶴先生のご自宅で、茶道の夏期講習会が行われた。日頃の部活動では決して目にすることのできない由緒あるお道具が並ぶ広間で、物おじしない国際校の生徒たちが、お道具の一つを指先でキュッキュッとなぞり「この文様、消えるかなあ。」と言う姿を偶然目にした顧問が、慌ててその動作を制したことなどは、今となっては懐かしい思い出である。講習会では千利休居士が大成した「わび茶」の世界を、より深く理解するためのプログラムを数多くご用意いただき、茶の湯の風情のなかの美的な境地を生徒たちに垣間見せてくださった。

秋の文化祭で茶道部は茶室『撫子』を出し、お客様にお点前や水屋、お運びのお稽古の成果を披露した。一方、華道部も毎年華展を出した。お花屋さんから届く花材を見て、草木や花の形状を見ながら自由にいける自由花や、草木の出生を考えていけるお生花のお稽古を通して、四季折々の美しい命と向き合った。そして年に一度、お稽古の集大成となる華展を成功させるべく、文化祭前日は遅くまで生け込み、当日は多くのお客様が来場された。



2022年国際校最後の文化祭で
華展準備をする高3生

嵯峨御流も池坊も学校華道の目指すところとして、『いけばなを通してこどもたちの感性を磨き、草花を扱い自然や生命について考える機会とする。』ことを挙げている。

表千家も、『雪月花という美しい響きが物語るように、日本の四季と人との出会いはいつの世でも胸を打つ。めぐりくる歳時とともに心のあらたまりを覚え、人とところを通わせることに茶の湯の楽しみはある。』と伝える。

生徒たちがお花やお茶の文化を学び、作法やそのことを知ることで、自然への理解や他者を敬う気持ちを育み、この美しい文化を未来へ繋げていこうという思いを持ってくれば、顧問として最上の喜びである。

（南山高等学校・中学校女子部教諭）

「書く」ことの取り組みの変遷と聖霊生

中村 春子

はじめに

異なる学年の保護者が集まる場で、卒業生同士だということで親しそうに話している保護者に、卒業生だとわかった理由を尋ねたことがある。同学年ではないので在学中に接点はなかったが、聖霊生の匂いがした、という言葉が返ってきた。似たような話は他にも聞いたことがある。制服を着ていなくてもわかる「聖霊生らしさ」がある、ということなのだろうと思う。

緑豊かな自然に囲まれたキャンパスで多感な思春期を過ごしていること、宗教教育や情操教育、さまざまな行事が聖霊生の心を豊かに育んでいることは、よく理解されているところである。ここでは、その一翼を担ってきたと思われる「書く」ことの変遷を、諸先生方の実践をふりかえることで見ていきたいと思う。

1980年代に生み出された、聖霊の特色ある教育の一つ

「南山アーカイブズニュース」第9号の記事でも述べられているように、1980年代前半、生徒募集の危機的状况を打開するために、聖霊の特色ある教育が相次いで生み出されていた。これらは、現在にも受け継がれて聖霊の伝統となっているもの、時代の移り変わりとともに形を変えたり役目を終えたりしたもの、さまざまである。聖霊の「書く」ことの変遷も同様である。

高3「生い立ちの記」

1979年に「生い立ちの記」が個人実践として行われた。「生い立ちの記」を書くことで、自分の成長を確認し、家族や周りの人たちに支えられてきたという人とのつながりに気づき、心の成長を語る。この実践は、1982年ごろから高3学年団による推薦入試合格者に対する課題として取り組まれるようになっていった。官尊民卑の強い愛知で、授業料の公私格差も大きく、私学ファンが集まるごく一部の学校を除いて、第

一志望で入学してきたわけではない生徒を多く抱えていたこの時代の私学では、自分に誇りをもたせる教育づくりが望まれていた。

中学部の合意事項になった「表現」の取り組み

1980年代の中学部では、どの学年でどのような活動を取り入れるのかを「合意事項」として定めていた。中1「原爆レポート」、中2「調査・取材レポート」、中3「修学旅行記」・「卒業論文」が設定され、どの学年、どの担当者でも行われる共通の取り組みとなっていた。

「3分間スピーチ」、「弁論大会」

1980年代半ばには「3分間スピーチ」や発表などの表現活動が活発に行われ、文化委員会が中高別の「校内弁論大会」を行った。その後、高校の弁論大会が廃止されたり、主催が文化委員会から国語科へ、そして生徒会指導部（中学文化委員会）に移ったりしたが、現在も中学の校内弁論大会は継続され、優勝した生徒は「私学弁論大会」に出場している。

中3「卒業論文」

高校入試のための受験勉強にかわる本物の勉強と位置づけられて1985年に始まったのが、中3「卒業論文」である。35人の担当教員による指導で始まり、生徒の変革や家族ぐるみのドラマ、教員の感動を生み出した卒論は、1988年から全教員が担当教員となって指導するようになり、現在に続いている。



卒業論文集



中3「卒論の手引き」と
高3「小論文バイブル」
1999年度から作られた「卒論の手引き」
の題字は今も受け継がれている

高3選択科目「国語表現」

1984年に始まったのが、高3選択群に配置された「国語表現」である。高3の選択群は週4時間（2単位×2群）あり、その片方の群に配置された。

これらの高3選択講座の特徴は、クラス定員が50人近かった時代に（教室の小さい聖霊でも49人）、教育条件を良くしたうえでのきめ細かな指導がなされたことだった。「国語表現」の講座ではほとんど毎週、600～800字程度の文章を授業時間内に生徒に書かせ、添削したものを次週に返却していた。「国語表現」の教育条件は、1講座約20名、同一担当者が担当するのは1講座のみ、（授業外に行う添削指導分として）1単位分の授業を1.5単位分と見なして持ち時間や非常勤講師のペイに反映する、担当者全員のミーティングを時間割内に組み込むといったものであった。希望する生徒数も多く、多いときには1学年240名程度のうち200名を超えたこともあった。

「国語表現」の成立に不可欠であったこれらの教育条件は、経営面だけで考えればなかなか認められるのではなく、聖霊の実践が多く場で報告されながらも、他の私学ではなかなか取り入れられることはなかった。聖霊は、カトリックの修道女会によって、世の人々に貢献する人間を育てるために設立された学校であり、少人数教育で、一人ひとりを大切に育てていく教育が大切にされているからこそその教育条件と思われる。これらの教育条件を認めていただいたことに深く感謝したい。

「ディベート」、「日本語総論」

「国語表現」の講座は、指導目標を進化させたり講座名を変更したりしながら、2023年高3まで続いていくことになる。開講当時は、推薦入試の小論文・作文対策を行ったり幅広い表現活動を行ったりしていたが、後に小論文対策は本格的な受験指導に変わっていった。

小論文を書くために、論理的な思考や時事問題についての知識が必要であることから、1995年に高2・3連続の選択群で「ディベート」講座が開講された。

自主活動を基軸に生徒を成長させていた聖霊の教育は、2000年代半ばになって進路指導をより充実させる時代に入っていった。推薦入試の拡大、AO入試の登場といった状況のなかで、入試小論文や志望理由書対策に重点が置かれた。2013年には「ディベート」講座に変わって2年継続の「日本語総論」講座が生まれた。高3での小論文執筆の前に、高2ではもっと幅広い表現活動に取り組みさせて、生徒の力を伸ばしていくというねらいであった。高3単年度履修の「国語表現」も「日本語総論」に名称変更して併存した。

このようにして「日本語総論」で入試小論文や志望理由書の対策を行っていたが、大学入試で課されるレポートでは学科ごとの色合いが強く、国語科だけではなく、社会科、宗教科、英語科、理科の実験など、たくさんの教科の教員が指導していくようになった。

2022年から高等学校教育課程が改訂され、高2・3に「総合的な探究の時間」が配置された。2024年度高3から、選択講座の「日本語総論」がなくなり、多くの教科の教員で担当する「総合的な探究の時間」で志望理由書等の指導が行われている。

さまざまな教科・場面での「書く」こと

ここまで国語科発祥の取り組みを中心に述べてきたが、聖霊ではたくさんの教科・場面で「書く」ことが行われてきている。EVE, My青春感想文集、宗教の授業の感想文、社会科の新聞学習、学年で取り組まれている行事ごとのふりかえり用紙、学年やクラスによっては欄いっぱいを書くことに決められているHR日誌の生徒所感など、枚挙に暇がない。「書くことは考えること」と位置づけられ、人間として考えておくべきことや他者の意見に出会い、感性や心を耕し、思考力を高めていくことが大切にされているのである。

成長してきた生徒たちの足跡をたどり、ともに過ごした聖霊生活に思いを馳せる場面として楽しみにされているのが、卒業式での「別れのことば」である。在校生代表による「送ることば」に続いて、卒業生代表によって語られる「別れのことば」は、「書く」ことにとどまらず聖霊教育の集大成であり、卒業生、在校生、教員が「聖霊」を深く感じる場面であるといっても過言ではない。「聖霊生の匂い」「聖霊生らしさ」が共有される瞬間でもあるのだと思う。

（聖霊高等学校・中学校 元教諭）

かけがえのない南山小グラウンド

林 幸寿

2023年、南山小の第1グラウンドが新しく生まれ変わりました。私が南山小に着任したのは2012年度。当時、開校から5年目で、人工芝の美しいグラウンドに感動したことをよく覚えています。児童が駆け回り、安全に寝転ぶこともできる、大人でもわくわくするグラウンドでした。しかし、開校から15年以上を経ると、当初のような美しさや柔らかさは薄れていました。そんな折、2023年度保護者会「わかみどり」のご寄付によって人工芝が張り替えられることになりました。9月4日には張り替え完成を記念して竣工式が行われました。このような大きな工事に接し、私の知らない南山小開設準備当時のグラウンドの構想について少し調べてみることにしました。



人工芝張り替え工事の様子

2007年当時、グラウンド予定地の一部には民家がありました。現在、砂場と備蓄倉庫のある場所には加藤邸がありました。清水建設との建築定例打合せの記録によると、2007年7月、解体に伴って倉庫として活用する案と、敷地内にあったイチョウの木を残す方針が話し合われています。現在、グラウンド外に位置しながらもイチョウの木は大切に残されています。設立メンバーの教員によれば、この木は季節の移ろいを感じられる樹木であること、そして南山小の設立に協力してくださった近隣の方々の思いを大切にしたいという願いが込められているそうです。

イチョウの他に、砂場のもう一方の隅にはシンボルツリーとしてウラジロモミが植えられています。そして、道路に沿ったグラウンドの西側には、低木のヒラドツツジ、カナメモチ、アベリア、キンシバイが植えられています。その背後には



残されたイチョウの木

中木のシラカシ、アラカシが植えられ、適度な目隠しにもなっています。児童が季節や自然を感じられることが、設計段階で大切にされていました。このことは、校舎東側の道路の植樹にも見られます。中高木としてソメイヨシノが、低木は季節に合わせて花が咲く常緑樹として、キシマツツジ（4～5月）、コクチナシ（6月）、キンシバイ（7月）、アベリア（9～10月）、カンツバキ（11～2月）が検討され、植樹されました。また、グラウンドと校舎をつなぐ階段下にはモウソウチク、ジャノヒゲ、コグマザサが、白川砂利と猿投の砂利とともに配されています。

遊具については、体育の授業に必要な鉄棒等に加えて、滑り台やロープウェイのあるコンビネーション遊具が提案されていたようですが、最終的にはザイルクライミングとウォールクライミングに絞られ、現在、どちらも児童に大人気となっています。

トラックラインは、130m、140m、150mの3つの案が検討された結果、現在の150mになりました。トラックは多目的活用の観点から60mの直線コース以外はラインが引かれていないものでした。この点について

ては、人工芝の張り替えの際に見直され、6レーン仕様のレーンマークが導入されました。

この変更には、南山小の運動会の歴史がかかわっています。南山小の運動会は、開校当初から南山高校校男子部・女子部の共用グラウンドで行ってきました。3年生以上はトラックを6レーン仕様にした徒競走が定番種目になっていました。そのため、毎年、小学校教員は共用グラウンドに6レーン仕様の150mトラックを石灰で引いていました。しかし、共用グラウンドで練習できるのは運動会前日のみで、それ以外は小学校のグラウンドで練習しました。そのために小学校のグラウンドにも6レーン仕様のレーンマークを引いていました。人工芝に引いた石灰のラインは雨風や児童が休み時間に走り回ることによって簡単に消えてしまいます。運動会の練習期間、体育専科教員を中心にトラックマークを何度も引き直すことが恒例になっていました。2017年度には、共用グラウンドでの運動会が3度延期の末、午後から雨天中断となりました。再開は初の南山小グラウンドでの運動会となりました。そんな経緯もあり、人工芝の張り替えを機に、6レーン仕様のトラックになりました。

グラウンドの変遷でいえば、設立当初の計画案では、第2グラウンドは、畑、水田、学年花壇として使用し、四季を感じる樹木（桜、ゆずり葉、柑橘系）、実のなる樹木（すもも等）が提案されていたと分かりました。しかし、2008年の開校から2017年度まで第2、3グラウンドは空き地のままでした。そして、2018年度、第2グラウンドはドッジボール専用コートになりました。決定までにはいろいろな案が出されましたが、児童が安全に、思いっきりドッジボールを楽しむ願いが叶ったといえます。また、第1、2グラウンドをつなぐ連絡橋も同時に建設されました。これは、設立当初の構想が実現したと言えます。第2グラウンドの設立記念式典に参加した折、校舎の建設も請け負った清水建設の担当者の、「2008年から『子どもたちに誇れるしごとを。』をコーポレートメッセージにしているが、また一つその実現をすることができた。」という言葉が印象に残っています。人工芝についても、2008年、2018年、2023年と積水樹脂株式会社の人工芝を使用し、中京スポーツ施設が施工をしています。単に施主と施工業者という関係だけではなく、南山小の願いに寄り添い、児童のよりよい成長を願う協働者という関係を感じました。



第2グラウンド設立記念式典の様子

開校当初の構想を調べてみると、忘れていたいくつかの設備の変化にも気づきました。開校前は、三面表示のポール時計も考えられていたようですが、一面表示の黄色ポール時計だったことを思い出しました。この時計は時間調整が難しく、のちにポール時計の場所には卒業記念品による鯉のぼりが設置されるようになりました（4月末～5月末の期間）。現在、グラウンドの時計は校舎屋上のエアコン室外機を覆う外壁に設置されています。これは、先述の雨天延期による初の南山小グラウンド運動会を経験した6年生による卒業記念品であり、エピソードとの縁を感じます。

開校当初の構想の中で、現在の課題として残っていることもあります。たとえば、開校前の打合せ記録に、グラウンドに木陰がほしい、という要望が残されていました。南山小のグラウンドは日当たりがよく、雨天後の人工芝の乾きが早いので、短時間で使用が可能になるのは、土のグラウンドに比べて大きなメリットです。一方で、日陰になる部分がほとんどなく、気温が高い時期に児童が体を休める場所がありません。開校準備のころからこのような心配があったことが分かりますが、未だに課題です。

児童の多くが大好きなグラウンドは、卒業後も思い出深い場所だと思います。そのグラウンドは開校時から現在まで少しずつ形を変え、これからも変化していくことでしょう。児童にとって、かけがえのないグラウンドであることは変わらないままに。

（南山大学附属小学校教諭）

南山学園での半世紀

近藤 健司

＜南山学園との関わり＞

南山学園との関わりは、南山中学・高等学校男子部で6年、南山大学で4年、職員として43年を合計すると53年もの長きになり、これまでの人生65年のうちの実に8割強の期間にも及ぶ。はじめて「南山」を認識したのは小学校5年生の頃の私立中学校の模擬試験会場が南山中学・高等学校男子部だったことであり、当時は別の中学受験を考えていたので、このきっかけがなければ南山とのご縁もなかったかもしれない。最終的に南山中学を受験した理由は、少人数教育（定員200名）であったこと、通学時間が短かったこと、もう一校は大人数教育（定員400名）であり、パンフレットに坊主、ふんどし姿で泳ぐ海の生活の写真があったこと等が大きなマイナス要素だったように記憶している。

＜南山中学・高等学校男子部時代＞

南山中学に入学して直ぐに、丸顔にリンゴほっぺだったことで「リンゴちゃん」というあだ名がついた。以来、圧倒的に本名よりもあだ名で呼ばれることが多くなり、先生・先輩や同級生からは「リンゴ」「リンゴちゃん」、後輩からは「リンゴ先輩」「リンゴさん」と呼ばれ続け今に至っている。職員になってからは近藤姓が多かったこともあり、全員が下の名前では区別されていたので「ケンジくん」「ケンジさん」と呼ばれた。AXIAアカウント名がどうして「ringo」なのかと疑問に思われた方も多いと思うが、実は中学の時のあだ名が由来となっている。

南山中学・高校での学校生活は本当に充実していた。中一の一年間だけバス通学したものの、同じ区内に住んでいたため中二からは自転車通学に切り替え、雨の日は徒歩でも通学した。勉強の方は概ね上位一割以内で、クラブは理科部天文班に入り、高校生の先輩もたくさんいたことからかわいがっていただいた。中

でも校内・校外合宿は非常にワクワクした。校内合宿はできたばかりのピッカピカの体育館の柔道場で寝袋で寝るのだが、曇った場合はあまねく天体観測ができなくなるので、大野球大会となる。また近くの「枳中食堂」やお好み焼きの「園」等で外食するのも楽しかった。校外合宿は御嶽山の王滝村キャンプ場に遠征するのだが、日中は暇なので御嶽山に日帰り登山もした。学年担任に日食観測で有名な山下俊樹先生がいらしたが、天文班の顧問は天津彰先生と斎藤邦弥先生で、常に校外合宿に帯同していただいたことをよく覚えている。

長年学年担任でお世話になったのは、森昭三先生（英語）、山下俊樹先生（理科）、岡田充弘先生（国語）、渡邊紘昭先生（数学）、宮川佳大先生（社会）であり、加藤莞二先生（体育）はじめたくさんの先生方にも本当にお世話になった。今であつたら大問題なのだろうが、毎回の小テストで10点満点中7点以下だとビンタされるとか、当てられて間違えとウチ首（素手で首をはたく）[先生がやりすぎで腱鞘炎になった後はウチケツ（竹刀で尻をたたく）に変更]になるとかの思い出はたくさんあるが、常に先生方の「熱意と愛」を感じていたので生徒達もイベントとして”大いに楽しんでいた”はずである。また定期考査では順位が張り出され、クラスによっては190番以降だと坊主にさせられる、という恐ろしいルールもあった。今のようにはモンスターペアレント等という言葉もなく、全権を学校に委ねるというある意味大らかな時代であった。

在学時にあった建物で現存しているのは、ライネルス記念館、講堂、中庭、運動場であろう。中学時代は現在のライネルス館が中学校舎であり、つながる講堂との間にはLL教室もあった。理科部天文班の部室はライネルス記念館と中庭の間の斜面にあり、天体望遠鏡はその部室に保管してあった。当時あった「学食」を

壊し一世代前の中学校校舎が建設されたが、我々の学年は高校進学タイミングで向い側の高校校舎（旧）に移ったので、職員室に行く以外に新しい校舎を使う機会はほとんどなかった。このときの中学校校舎の屋上には天体観測用のドームがあったが、この校舎も今は跡形も残っていない。

高校一年の時に、男子部・女子部合同でアメリカに一ヶ月の英語研修に行くプログラムが始まり、アイオワ州EpworthにあるDivine Word Collegeで英語を学ぶ機会があった。男子部・女子部から各20名が参加し、引率として男子部から森昭三先生、春日井直吉先生、女子部からは伊藤肇先生、本藤毅夫先生が帯同してくださり、期間中にマイケル・リンストロム先生（現聖霊高中校長）のご実家を訪問したり、日本を紹介するイベントで盆踊りを披露して現地の方々と交流して盛り上がった。また帰路にはディズニーランド、ハワイに立ち寄るという豪華な内容だった。

進学相談では国公立の受験を強く薦められたが、英語研修を経験したことで英米への興味が高まり、南山大学外国語学部英米科の推薦入試（2科目受験）を受験し、無事入学することになった。



Divine Word College（キャンパス）



ゴールデンゲートブリッジ（サンフランシスコ）

<学生時代>

英米科の授業はある意味壮絶だった。受験勉強をも上回るハードなもので、何故かというと言学は予習・復習が必須であり、それが週に8回（英会話3回[月水金]+英作文2回[火木]+訳読1回[木]+第2外国語（仏語）2回[火木]）もあり、正に枚挙にいとまがないとはこのことだったが、前期が終わる頃には少し慣れてアルバイトもできるようになった。一年生の指導教員は岡部朗一先生、二年生の記憶はないが、三四年のゼミは国際経済学の西村貞雄先生で、リサーチペーパーのテーマは「日米自動車摩擦の一考察」であった。アルバイトは1年の頃から大学の図書館でさせてもらった他、家庭教師、ガソリンスタンド、トラックの運転等をかけもちし、これまた非常に充実した学生生活だった。クラブは一年生から「ユースホテル研究会」という文科系公式クラブに所属し、学生時代の4年間に全国のユースホテルを100泊することを目標に、春夏の長期休暇期間にアルバイトで稼いだ資金を原資に、周遊券を使って全国を旅し達成した。北は礼文島桃岩荘ユースホテルから、南は鹿児島指宿ユースホテルまで全国を巡った。真冬の北海道はユースホス

テラーにとっては”シーズン”でどこのユースも混んでいたが、オホーツク海側を流水を見ながら稚内まで北上したのは学生時代にしかなし得ないよき思い出である。

大学4年になって就職を意識した際、大学図書館で4年間アルバイトした経験を活かし司書の資格を取ってみようと思い立ち、当時の南山大学には司書課程がなかったので横浜にある鶴見大学の司書課程に応募し参加した。学生最後の貴重な夏休みを、講習・試験を繰り返しながら関東で暮らしたのはなかなかハードだったが、無事司書となる資格を取得し、学校法人南山学園の採用試験に臨んだ。ちょうどこの年は採用が多く同期で十数名が採用されたが、そうでなければ難しかったはずなので、これもご縁と感謝している。



卒業式

<職員時代>

こうして南山学園職員としてのキャリアがスタートしたが、職歴は以下である。

図書館→教務課→人事課（日本私立大学連盟に半年間出向）→総務課→瀬戸キャンパス学務係→キャリア支援室→事務システム課→入試課→図書館事務課→キャリア支援室→情報センター事務室

・図書館

当時は大学事務のOA化が少しずつ始まる時代で、PCが一人1台というのは夢のまた夢であった。ご多聞にもれず図書館の目録カードは手書きであり、それをコピーして書名目録、件名目録等に目録編成する、という究極の手作業の時代であったが、そこにOA化（EUC[End User Computing]でシステムを開発する）の流れがやってきて、閲覧貸出システムの開発を担当した。UFO（User Files Online）という言葉を使って、IBMの大型汎用機上で画面を動かすためのオンラインプログラムをユーザレベルで作成する、というものでこれがなかなか楽しかった。この頃、同期で図書館に配属された職員と結婚し、現在も幸せに暮らしているのも南山が作ってくれたご縁だと感謝している。図書館システムが完成した頃、同じくEUCでシステム開発を行っていた学務部チームの開発が遅れているということで教務課に異動した。



ウイングクラブテニス同好会合宿（木曽郡上松町）
村上先輩と

・教務課

教務課ではシステム運用、時間割、教職、大学院などを担当した。成績原簿を手で作成し、読み合わせるという手作業の時代から、履修ルールを基に系統的に登録管理を行い成績表を出力するというOA化の時代であった。開発が一段落し無事運用が始まった頃に教務課で係長になったが、直後に半年間の日本私立大学連盟への出向を命じられた。

・日本私立大学連盟（出向）

日本私立大学連盟では研修事業部に所属し、当時活発に行われていた事務職員等総合研修の事務局をサポートした。出向期間を通して人脈がかなり広がった。

この出向制度により10年間、20名の南山学園職員が私立大学連盟に派遣されたが、前期半年は職員研修を実施する期間（私はこちら）、後半半年は成果を報告書にまとめる期間で、内容には随分差があったように思う。半年の出向期間中は学園が契約したマンション（高円寺）に住み、月に2回帰名する交通費が支給された。

・総務課

半年の出向が終わり、総務課に配属された。と同時に、建物建築のラッシュが始まり、学生会館（コパン）を皮切りに山里交流会館、瀬戸キャンパスの建設へと続いた。着任前の10年ほどは新しい建物を全く造っていない空白期間だったので、儀式ノウハウの蓄積がなく、地鎮祭、落成式等のキリスト教的な行い方が分からず情報を集めるのに苦労した。また50周年記念事業・募金も苦労の連続だった。ご来客用と学内者向けの2回の記念式典をホテルで行った他、最終的には50周年募金の事務局も総務課が引き継いだので、募金額の管理まで担当した。中でも忘れることができないのは幻の「50周年記念ホール」の建設である。総務担当副学長を委員長に建設準備委員会が立ち上がり、総務課が事務局になった。旧丸紅マンション跡地（現在のA,B,S棟辺り）に「50周年記念ホール」を建設するという計画で、各委員からは瀬戸キャンパスを建設中にそんな資金があるのか？という意見がある中、このための資金が用意されているとの説明があり、設計図も提示され各学部から意見を聴く委員会当日の席上、委員長より資金がないため建設計画は白紙とし委員会を解散する、との報告があり委員会は終了した。あの時50周年記念ホールが出来ていれば卒業式、入学式等の式典に活用できていたと思う反面、後のキャンパス統合への対応は難しかったのではと、今となっては思えるのである。

一方瀬戸キャンパスの準備は順調に進み、学生数が増えることで入学式を体育館で行うことができなくなったため、人数的に行える外部施設（初めはセンチュリーホール）を探し、挙行までこぎつけることができた。式典中はローソクに聖火を灯すのだが、「火」を使う場合は事前に消防署への申請が必要だったことが当日分かり、神父様の発案で急遽「炎」の絵を書いてローソクに貼り付けて学生代表が入場したことは、今

でも鮮明に記憶に残っている。正に激動の総務課時代であったと言える。

・瀬戸キャンパス学務係

瀬戸キャンパスの一期生を無事迎えた年明けの1月に瀬戸キャンパス学務係に異動した。瀬戸キャンパスでは、一期生達がクラブ・サークルをまとめるクラブ委員会が出来たり、瀬戸キャンパス祭運営委員会も立ち上がり聖霊短期大学と合同で「聖南祭」を始めた。NAP（Nanzan Asia Program）で2週間タイにも帯同し、その後一期生の就職を担当したのがよい思い出である。またここでは総合政策学部と数理情報学部の教職課程の申請業務にも携わり、文部科学省に課程認定の申請に出向いた。瀬戸キャンパスは2017年3月に閉学したが、瀬戸キャンパスのクロージングセレモニーに参加し多くの卒業生に会えたのは本当に嬉しかった。ここでも一期生が当時のまま、頑張ってくれていたのが非常に印象的だった。



瀬戸キャンパス

・キャリア支援室

自分が学生の頃の職業指導室は本部棟2階の現第4会議室にあったが、キャリア支援室に着任した時は旧第一学生食堂の2階にあった。そこで学生の就職をサポートしながら、キャリア教育準備委員会の事務局として「キャリアサポートプログラム」「インターンシッププログラム」「就職支援プログラム」の3本柱からなる枠組みを作り、それが今でも続いているのは嬉しい限りである。また入試会場として使用した体育センターをそのまま継続して使用し、ブース形式の学内会社説明会を実施したのも記憶に残っている。

・事務システム課

次期事務システムの開発のタイミングで、事務システム課に異動した。ポータルシステム（PORTA）は開

発業者側のパフォーマンス不足により稼働が一年遅れになったが、関係者の努力で無事稼働にこぎつけ、アップデートしながら現在も利用されている。

・入試課/図書館

その後入試課広報係に異動したが、慣れない業務と超過勤務の多さで体調を崩し、半年という短い期間で図書館に異動させてもらい体調を整えることができた。

・キャリア支援室

2度目のキャリア支援室では、学内会社説明会の参加企業を100社増やして400社にしたり、就活生支援（エントリーシートの添削等）でかなり充実していたが、毎回イベントを瀬戸キャンパスに同時中継するのはかなり負担だった。その後、瀬戸キャンパスの総合政策学部が名古屋キャンパスに移転することになり、受け入れるための新棟（Q棟）にキャリア支援室も移転することになり、引越隊長として準備万端整えた矢先に、引越を待たずに情報センター事務室に異動となった。

・情報センター事務室

2度目（出戻り）の情報センター事務室は、情報教育係で利用者サポートを担当した。新棟（Q棟）のキャリア支援室の対面に「ラーニング・コモンズ」（学生用の学習スペース）が設置され、情報教育係が担当することになったので、対面にキャリア支援室を眺めながら開室準備を行うことになった。またその後のレーモンド・リノベーションプロジェクトでN棟・第2研究室棟にも新たに「ラーニング・コモンズ」が設置され、併せて管理を担当した。授業以外に自由に学びのために使えるスペースは学生に好評で、今も多くの利用者で賑わっている。



ラーニング・コモンズ

情報教育係として利用者目線でのサービス展開を働きかけ、情報基盤係の協力でそれまでは申請の翌日から利用できる仕組みだったアカウント申請を、即時に利用開始できる仕組みに改善できた。併せて、冊子のみであった利用案内を情報センターWebサイトに変更し、動的に情報を発信できる基盤を整えた。直後にコロナ禍が発生し、オンライン授業への対応が急務となったが、こういった基盤が整っていなかったら事態はもっと大変になっていたはずである。

新型コロナウイルス感染防止対策は今でも忘れることはできないほど大変だった。情報基盤係がオンライン会議システム（Zoom）と授業科目毎の資料ダウンロードサーバの仕組みを整えることに奔走し、情報教育係はヘルプデスクを担うことになった。誰もこなくなった教室に数十本の電話回線を引き、学生対応と教員対応のチームに分かれ、情報センター事務室にかかる電話を振り分け、順次サポートする体制を整えた。オンライン授業の開始初日に20ほどある電話の窓がすべて真っ赤に点滅したのは、おそらく一生忘れないだろう。定年退職前の60を過ぎてこんな大変な目に会うとは夢にも思わなかったが、今となってはよき思い出である。あの当時の情報センター事務室のスタッフの皆さん、本当にお疲れさまでした。

＜最後に＞

43年の職員生活を振り返ると長くもあり、また充実していた分短くもあった。毎年提出する自己申告での目標として「創意工夫に基づく業務の標準化・効率化に向けた改善力」「常に問題発見・問題解決の意識を持ち、業務の効率化を図る」を掲げてきた。若干手前みそではあるが、今でも使われている「南山学園規程集」(Web) や「内線番号早見表」は私が手掛けたものなので、使う際に少しだけ思い出していただけると非常にありがたい。

最後になってしまったが、これまで関わっていただいたすべての方々に心より厚く御礼申し上げ、私の回想をしめくりたい。生きていればぜひ「南山学園創立100周年」で皆様にお目にかかりたいものである。

(南山学園名誉職員)

【表紙写真解説】

1964年完成の大学本部管理棟（現本部棟）は、建物の西側内部に「螺旋階段」が設置されており、教職員が1階と2階を往來の際に利用していましたが、大学本部管理棟の増築後（1979～1980年増築）は螺旋階段が撤去され、折り返し階段が設置されました。



大学本部管理棟（増築前）



大学本部管理棟（増築前）



大学本部管理棟（増築後）

史資料提供のお願い

南山アーカイブズでは、以下の欠号になっている史資料を探しています。

ご寄贈いただける場合は、南山アーカイブズまでお持ちいただくか、郵送・学園便等でお送りください。

- 『南山大学卒業アルバム』（1980年、2008年）
- 『NANZAN HIGH SCHOOL BULLETIN』（No.131、No.132、No.133、No.134）
- 『南山短期大学ブレティン』（49号 2004.10.10）

また、南山学園に関する以下のもので、南山アーカイブズへご提供いただけるものがありましたら、ご連絡いただきたくお願い申し上げます。

- モノ史料：鞆・校章・バッジ・体操服・制服など
- 写真：授業風景・学生生活・サークル活動など（撮影年月日が分かるもの）

※史資料の取り扱いについては、個人情報が含まれている史資料は非公開にするなど、十分注意しております。

寄贈者による公開制限希望にも対応いたしますので、お申し出ください。

< 連絡先 > 学校法人南山学園 南山アーカイブズ

TEL052-861-0613/FAX-052-861-0614

E-mail : nanzan-archives@nanzan.ac.jp

第8回企画展のご案内



2025年 10月1日 水 ~ 2026年 7月31日 金 開催



モザイク壁画「聖母子像」
1985年3月8日寄贈

友の会より寄贈されました。
聖母子像の周りには、“SPES
ET GAUDIUM” = “希望と喜
び” とあります。



壁画「世の光」
1998年8月設置

創立30周年を記念してレリーフ
壁画“LIGHT OF THE WORLD”
= “世の光であるキリスト”
が友の会より寄贈されました。

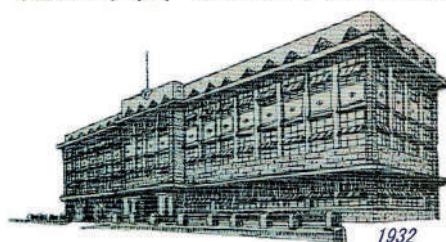


名古屋市昭和区五軒家町6番地（ライネルス館）

※アクセス：地下鉄鶴舞線「いりなか」駅2番出口より
南山教会方面へ徒歩5分

※駐車場はございません。公共交通機関でお越しください。

南山学園 はじまりはここから



学校法人南山学園 南山アーカイブズ(ライネルス館)

南山アーカイブズニュース 第18号 Nanzan Archives News

発行日 2025年11月1日
編集・発行 南山アーカイブズ
名古屋市昭和区五軒家町6番地
印刷 ウサミ印刷株式会社
名古屋市西区児玉1丁目10-7